

鹿兒島戰記 初号 上



篠田仙果録  
永為子孫之富

繪本 鹿兒島戰記

東京 青成堂書板

A420

緒言

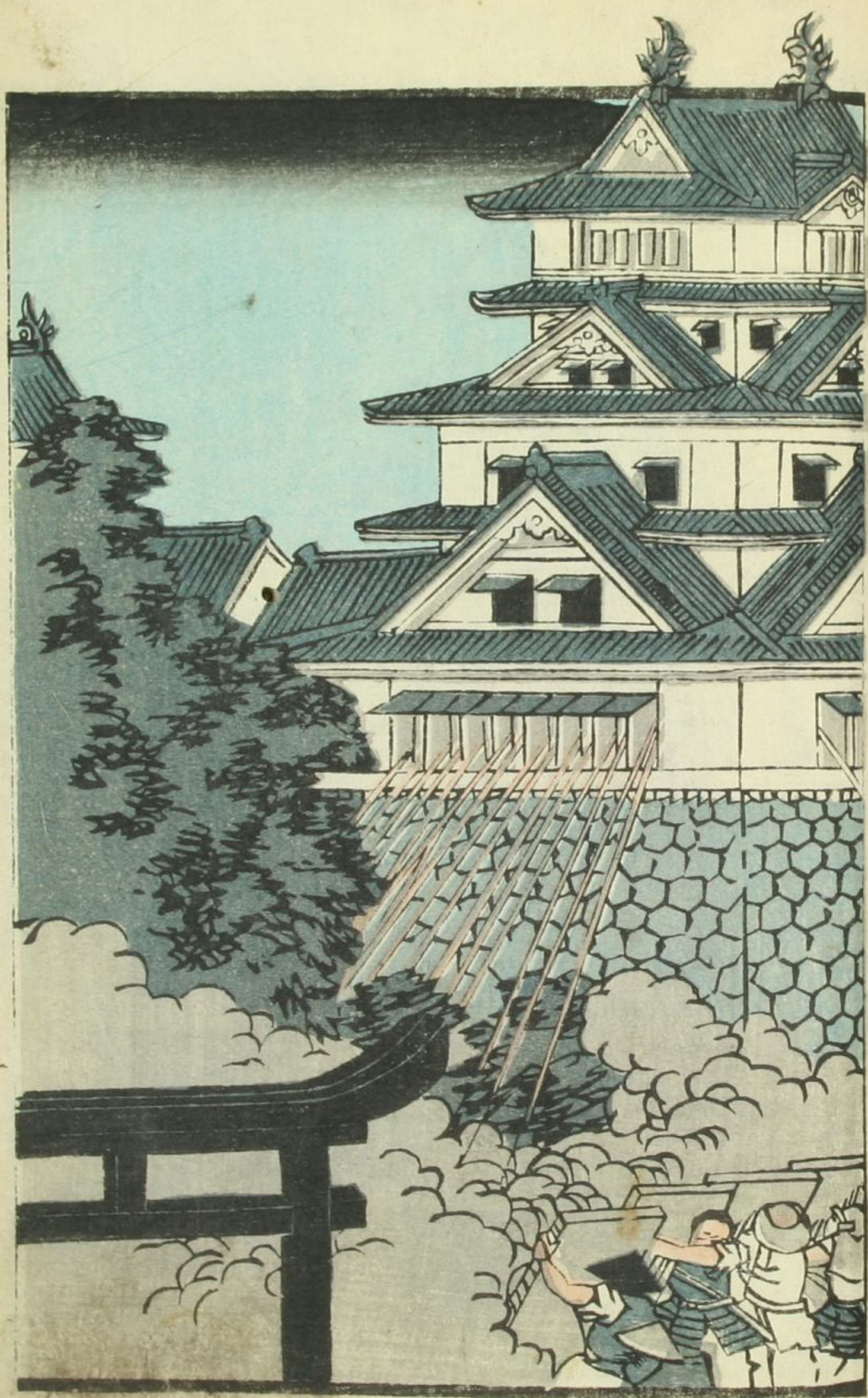
春あれど未だ去ぬ寒氣は恐甚、鐵砲汁も好ましく、  
空然と暮し、眠氣覺へた。急須小入を茶の受と。  
鐵砲玉と同時世の菓子。鐵砲垣に鎗梅鉢。うら  
喜びる南窓と。青成堂の主人が音信。鹿兒島  
戦記を録ふと乞を乞。ハイと承諾すも筆をこの  
ろくぬを。未だ出来ぬりと矢の使ひぬ。無鐵砲り  
記しぬる。當るこいぶを祝す。わん

明治十年二月下院 篠田仙果

戦記場



48-9867



鹿兒島乃  
 暴徒等熊  
 水城之鎮  
 臺兵と激  
 戦以



夢史のあり

情の復く五

花枝のうす

木村和布

田村啓二郎



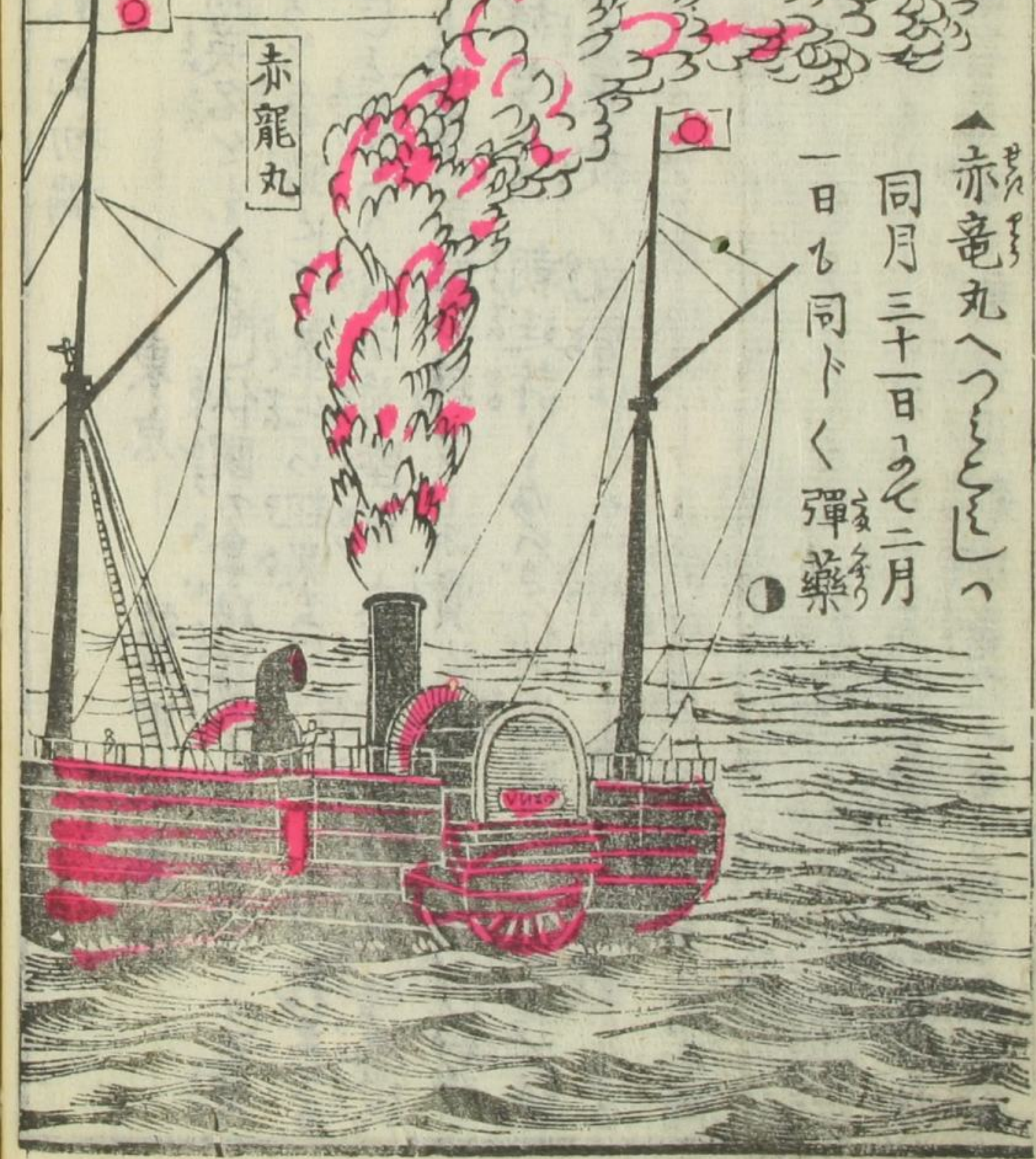
内田正風

繪本鹿兒島戦記初編

東京 篠田仙果記

近世五大洲中の英名とてころせし仙國の拿破崙ははじめアジヤに島  
 の書生より出ると電鑑として塾生ら粗暴うり行いせし者これまて  
 江湖上の厄閑世と屢あり茲小前陸軍大將兼参議西郷隆盛氏  
 維新の功と奏し明治六年職と辞せし小賞として二千石ありけり  
 西々氏これを辞せし小朝廷許しありされば恩賜二千石の金とて  
 鹿兒島縣下の私学校と設置せしく同族士族の青年輩へは  
 色も生徒とありるが文を捨ひて武道のを修行せり時小  
 治十年一月下旬右私学校生徒ら暴挙のありども夙うわびの  
 士族生徒らへ多くより容易なる所密謀と企てるより確証も  
 有之政府より注意せられ本年一月廿七日大坂鎮臺の命とて  
 陸軍の士官数名ニ三菱の郵便汽船赤竜丸を組まれ大坂を

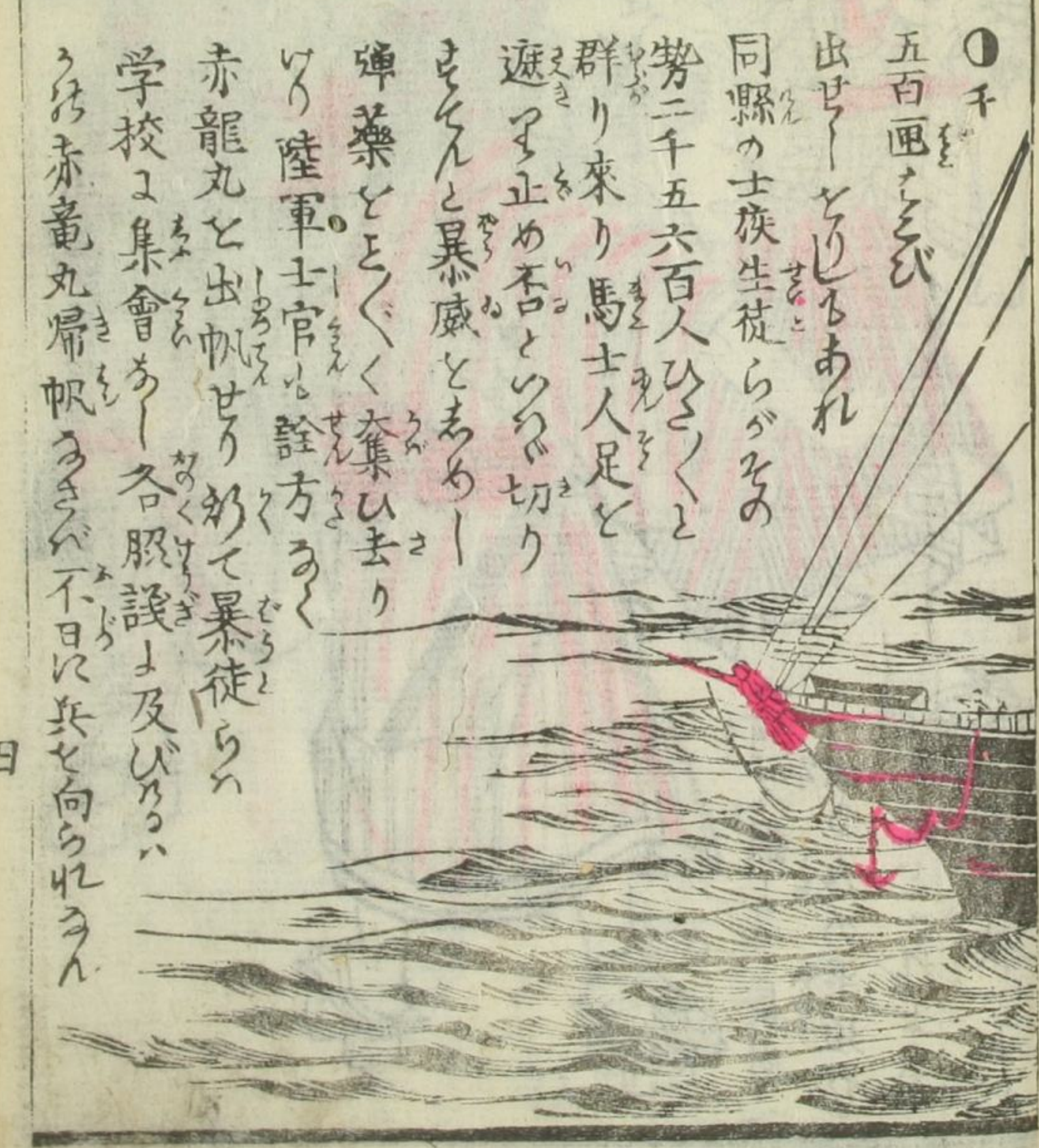
出帆 大隅の沖 佐田の岬と右へ 薩摩 土とりの海門 岳の林麓海門 口より十三里 入りて鹿兒島 港小着せし 公濱つき



赤龍丸へつとて二月 同日三十日とて二月 一日も同トく弾薬

赤龍丸

ある磯町の 混の上とつる 地不ある陸軍 省造舟所 畜へあり 弾薬二千 画と馬小付 又一人歩 負せる 富士



○千 五百画とて 出せしとつるあれ 同縣の士族生徒らとつるの 勢二千五六百人ひとつと 群り來り馬士人足と 遮り止め否とつる切り せんんと暴威とあり 弾薬ととくく棄ひ去り 陸軍士官と詮方あり 赤龍丸と出帆せり初て暴徒らに 学校と集會あり各股議し及びつる 赤龍丸帰帆するに不日に兵と向られん

左あふべ此方々  
十分のその  
手當つて  
艦を但し  
攻めせるとも  
港内一臺  
場ありまゝ  
祇園洲の  
暗礁あり  
先年  
英國  
軍艦



阿久根より長寄へ  
出る及の平坦な  
れどこれす  
及路狭りれば

彼の洲よりの船底の

敗色をそろうとあれど

たろすく船の

かつ且大隅の接島と

薩州の瀬戸乃

間もつた二丁有

余たれべ此所

あての食止せ

又陸つては

色の道も

嶮岨も

九十九折

ゆ



車馬の通行思ふもよるねを

鎮臺兵も恐るに

菜と畜ふ先今宵磯町

陸軍省造船所

同トク

砲兵属

廠へ

よせ弾

菜を

寄長

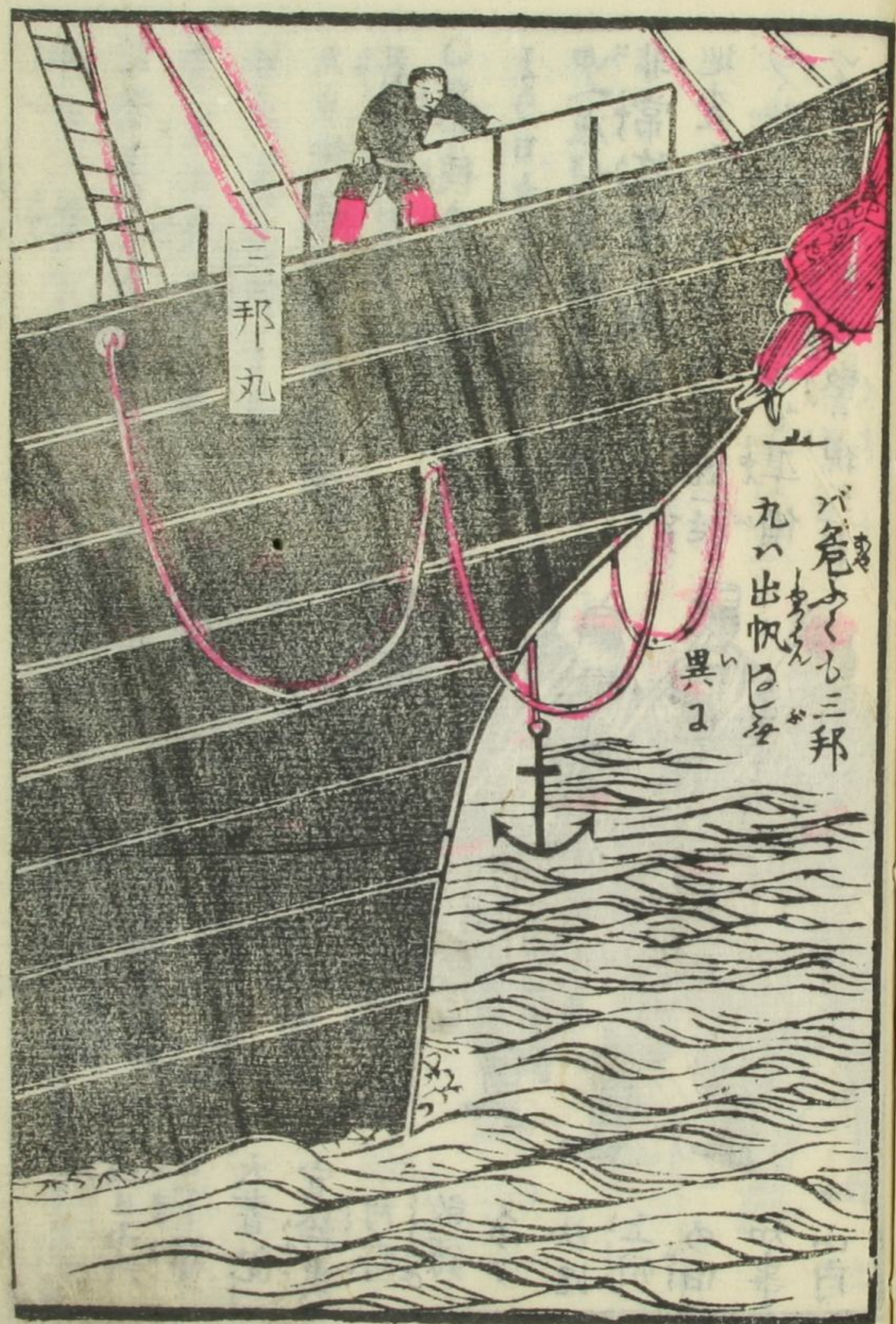
鏡二万挺賣



物ありと伺われれば右品より買とる  
 産く七庵の上地の製  
 造所は設けある弾薬  
 器械は日々三十奈  
 出来ませむし  
 夫ありても不足とあるは近國の  
 士族へ依頼の進送もあるは  
 各々支度ゆきされよとニタ  
 小ころれ押出ー一ト  
 弾薬製造所下  
 砲兵属廠小入  
 工部  
 スナイトル

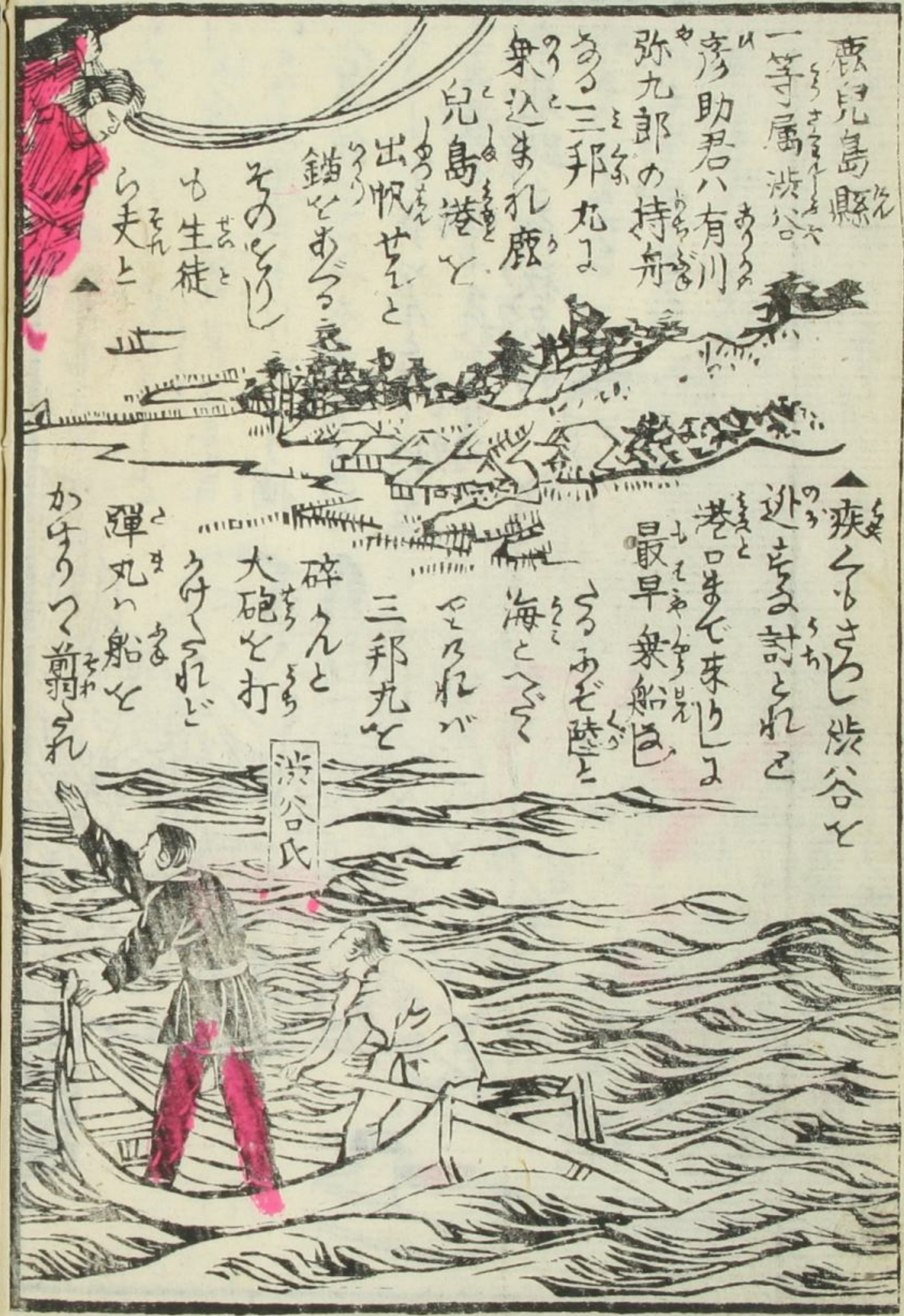


鉦多しひふ彈薬若干と  
 ろをひこのをさめゆくと  
 引あがり翌日暴徒長寺へ  
 けり彈薬十行買とる猶  
 元は銃二万挺をど賣りの  
 あつて買つんとせぬその  
 さぬ最も怪しむるが奇同の  
 末見頭され救名捕  
 縛つたなる  
 扱も生徒かその  
 勢ひますくさるる  
 ろりは我が夏の顛末出府の  
 上委細上申りさすべしと



三邦丸

バ危くも三邦丸の出帆は異



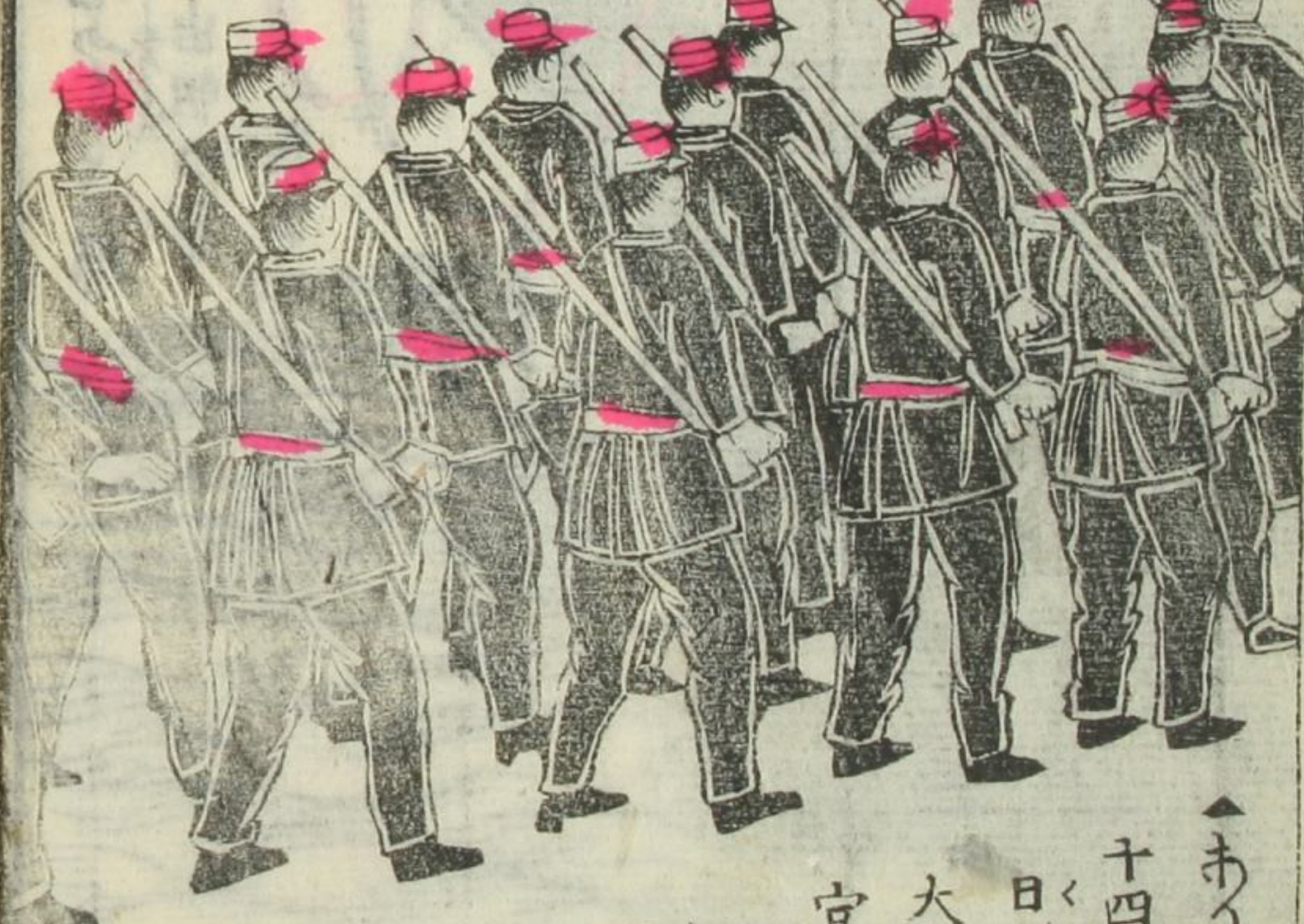
鹿兒島縣 一等属渋谷 彦助君八有川 弥九郎の持舟 三邦丸よ 衆込まれ鹿 兒島港と 出帆せんと 錨をぬる意 そのとら 生徒と 夫と

疾くもさし渋谷と 逃さむ討とれと 港口まで来りしよ 最早衆船は 海とさ 三邦丸と 砕くと 大砲を打 弾丸の船を かぎりつ前れ

渋谷氏



神戸へ着くニツ菱の  
同所よりニツ菱の  
東京丸乗之り也  
神戸より出帆し二月  
九日午後二時ごろ横濱へ  
着されたり  
○暴徒の事件を各所  
より日々の電報救千通  
ゆへ鹿兒島縣下の近傍を  
非常監護の爲とす  
巡查六百名スナイドル銃一挺  
づ警部へヒートルと準備  
つるれ綿貫少警視二百

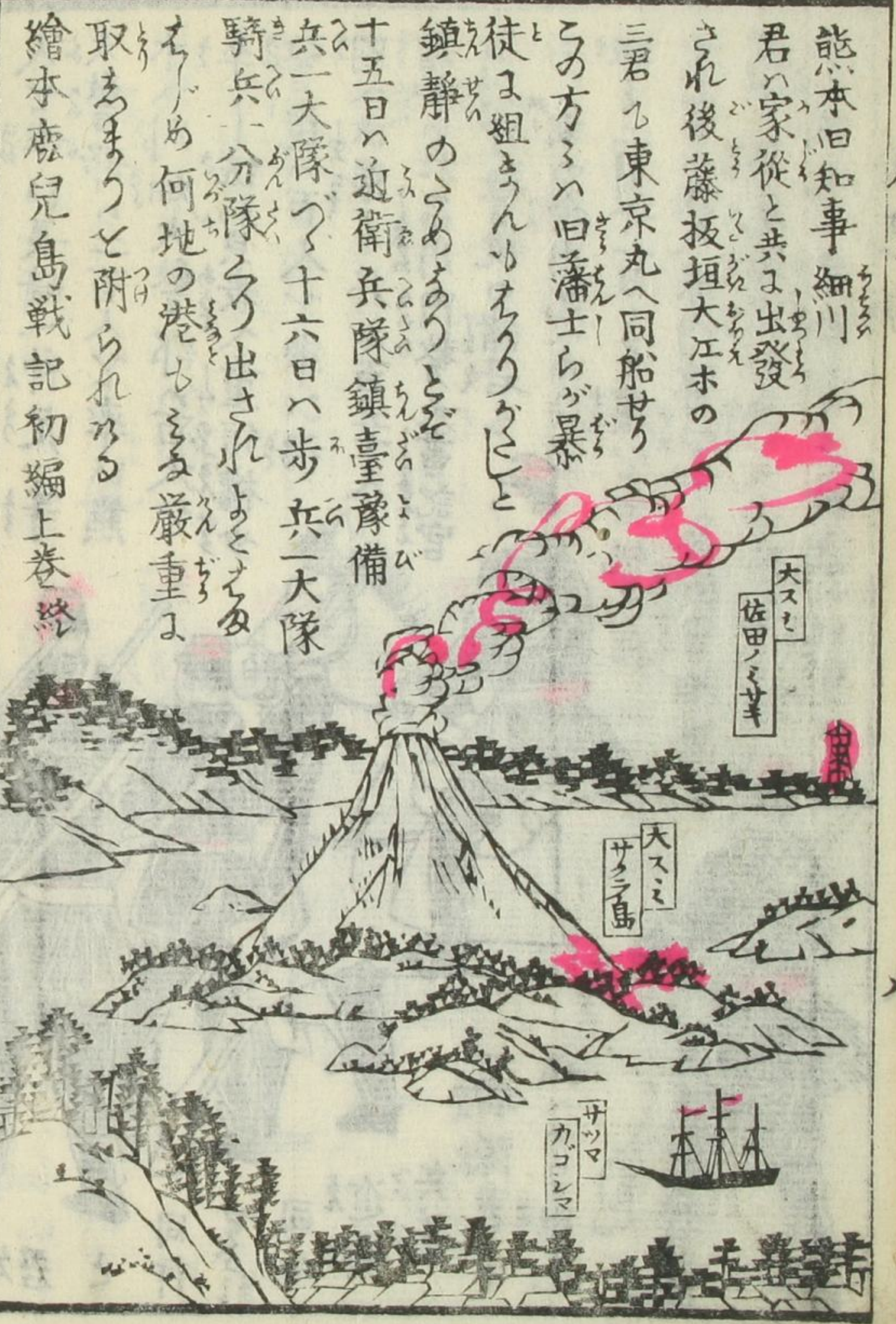


十四日  
日下部  
大書記  
官幹吏  
河野  
敏録  
あし  
ひに  
上州  
の旧  
知事  
山内

入と率ひ長崎へ神足一等  
大警部二百人と率ひ熊  
本へ川畑大警部二百人と  
率ひ佐賀表へ重信権少  
警視二百人と率ひ福  
岡へ出張し外百五十人  
増加られ品川内務大書記官  
石川中警視の諸君も  
ニツ菱の金川丸へのり  
組と二月十一日よと濱と出帆され  
十三日へ大久保内務中島議官柳原  
議官鳥尾陸軍中將大山陸軍少將  
へ玄武丸に乗船ありて西京へ出發



と君  
同行  
せられ  
同日  
近衛  
兵隊  
一聯隊東京  
丸へのり組也



熊本田知事細川君の家従と共に出發され後藤藤板垣大江ホの三君も東京丸へ同船せりこの方へ曰藩士らが暴徒と組まらんもちろりうじと鎮静のつめありと云々十五日の迎衛兵隊鎮臺豫備兵一大隊づつ十六日へ歩兵一大隊騎兵一分隊づつ出されよと云々云々何地の港もよと云々嚴重よ取らまうと附られなる繪本鹿兒島戦記初編上巻終

明治十年二月廿六日御届

定價六匁五厘

下谷上野町二丁目十二番地

編集人 竹條田久次郎

米沢町二丁目七番地

出版人 堤 吉兵衛

鹿兒島戰記 初号 下



篠田仙果録  
永島孟齋畫

繪本 鹿兒島戰記

東京書肆

青成堂版

鹿兒島戰記初編下之卷

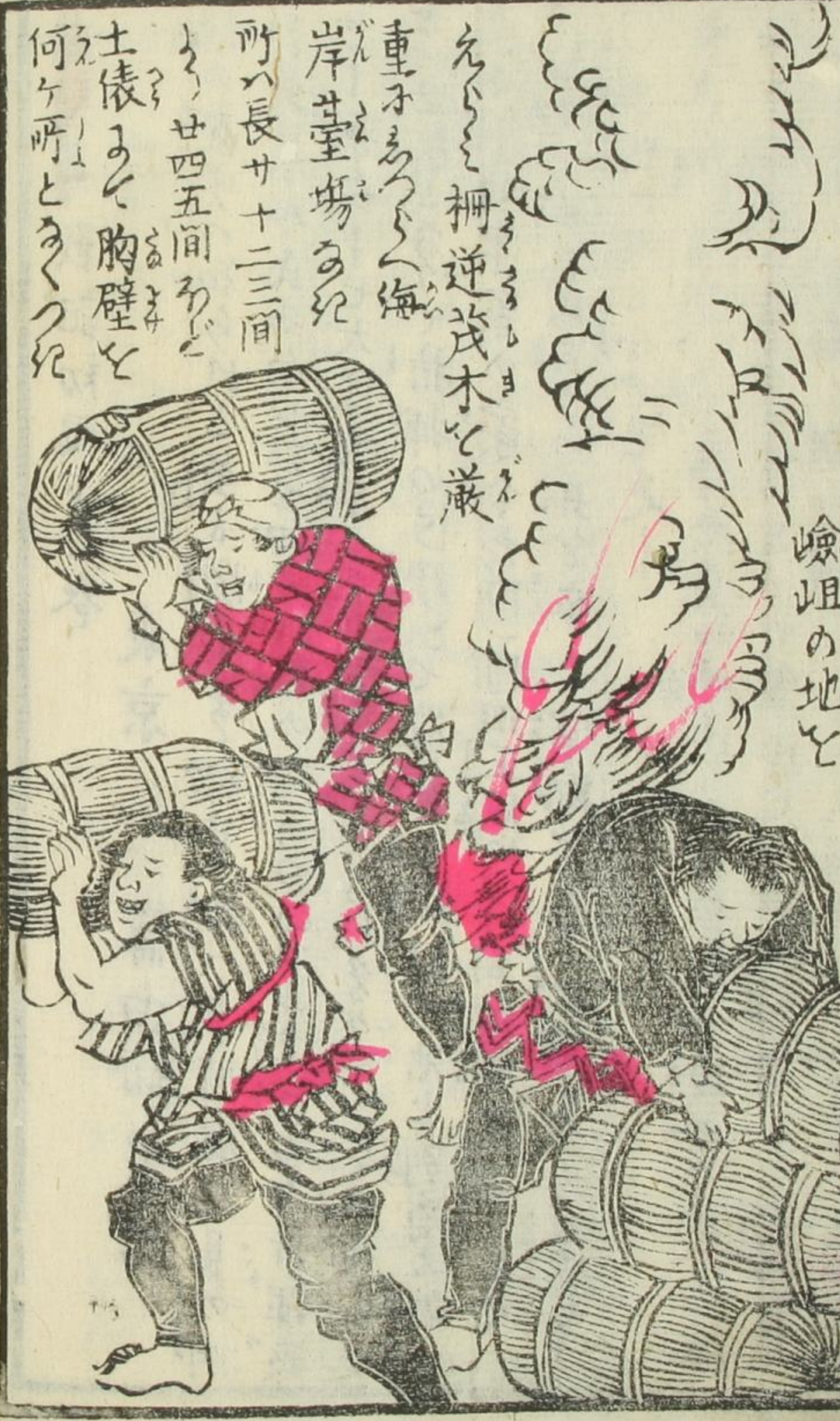
東京

篠田仙果記

説の虚実へ知り候と雖も別々録せる話ある時鹿兒島の桐野氏の西々氏を向つれて四方八方の語のついでに某日その指揮致せし精兵十七大隊を卒し上京せんとつれども果して此度生徒亦が巨魁となりて指揮のに續いて篠原長山村田池上別府の諸上并小田島津家の家令たりし内田正風ゆづれも頭取ありると一説は西々氏自ら兵を卒し軍配とり出張すと風説せり尚後の段と合せるといふ

そのく薩州の人氣たるを勇と好んで死をあたれず瑣細のるも争論を闘競不及べるに常ありてゆづりゆづり且從前より兵備あり島津家の直隊と錦虎隊とを三千人桐野氏の組あり狙撃隊とを三千人西々氏の組と玄牛隊とを一万五十人の組とを徳強の壮りの

あり他話へさそあひら私学校生徒ら陸ハ  
嶮岨の地と



何ヶ所とろくつに  
土俵もく胸壁と  
所ハ長サ十二三間  
岸堂場もれ  
重なるつと海  
えくも柵逆茂木と蔵

並へ通路と固めて旅人を入とび

鹿兒島と根城とありぬ然るにうねて  
通ちたるを但し生徒が暴挙の沙汰と  
疾くも傳聞るせしと

日向國の宮寄の

士族へ鹿兒島

の暴徒方へ小銃  
弾薬を送り久留米

への鹿兒島暴徒救百名

入ると柳川の士族ホも応援  
をべきなりやあ熊水士族も忘

せりのあり筑前國甘木町へも  
水士族屯集せりと佐土原の士族

三百人ほど延岡の士族を鹿兒島へ脱走せり又羽州鶴ヶ岡へ鹿兒島士族一名入るる曰参事の松平某の宅にて毎度集會あり高知縣下の上族らも何事ある諸方お出まると鹿兒島縣士



後にも不審の類あり

族の吉川次郎とける者ハ先年中大久保内務々の執事五そあり色も酒身持つとけり久られ大久保家を暇とあり



探索ありお茶不違徒り荷擔事頭あり熊本縣士

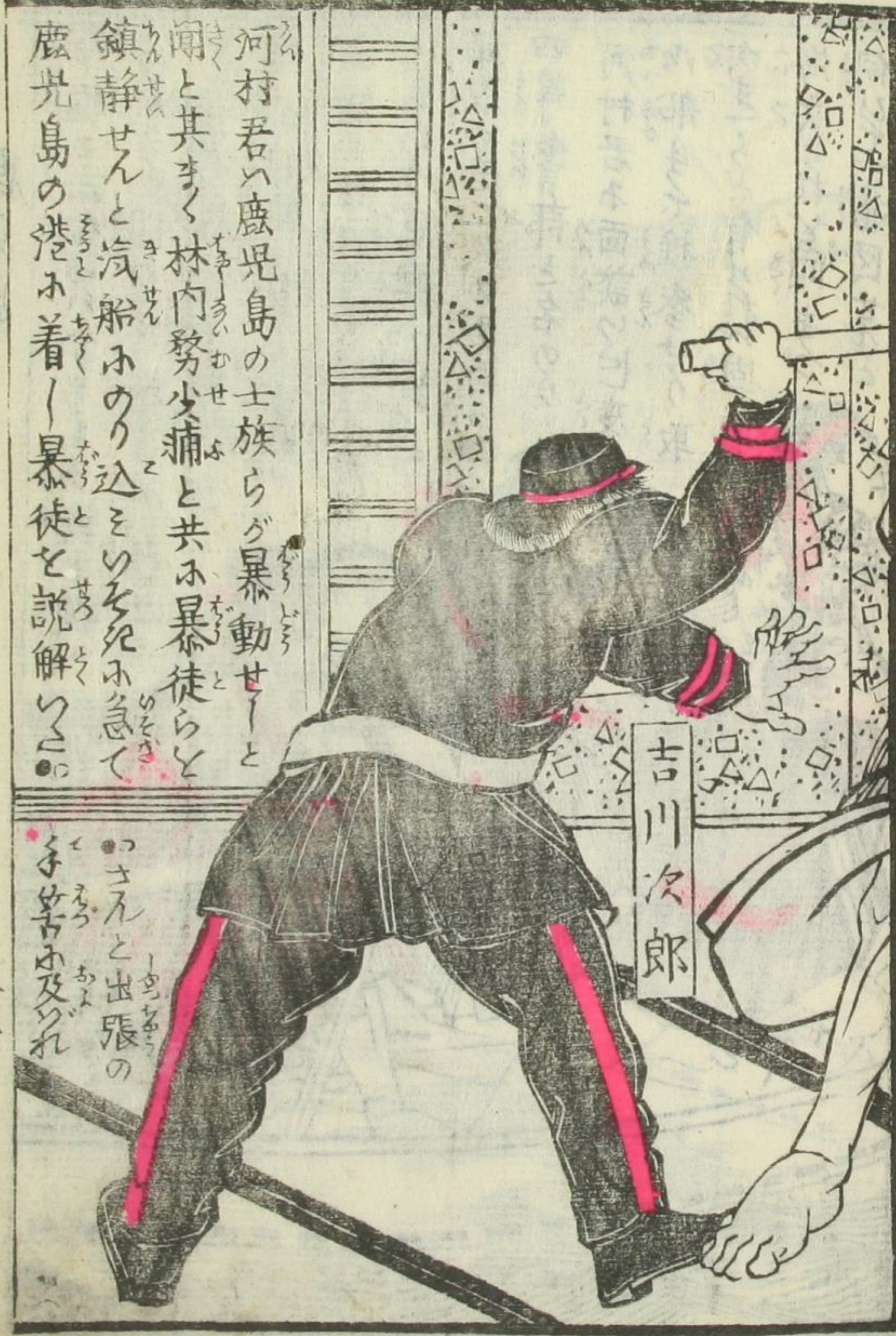
平山容その余  
同縣士族四五  
名何れも此度  
の事件よ  
組し



吉川次郎

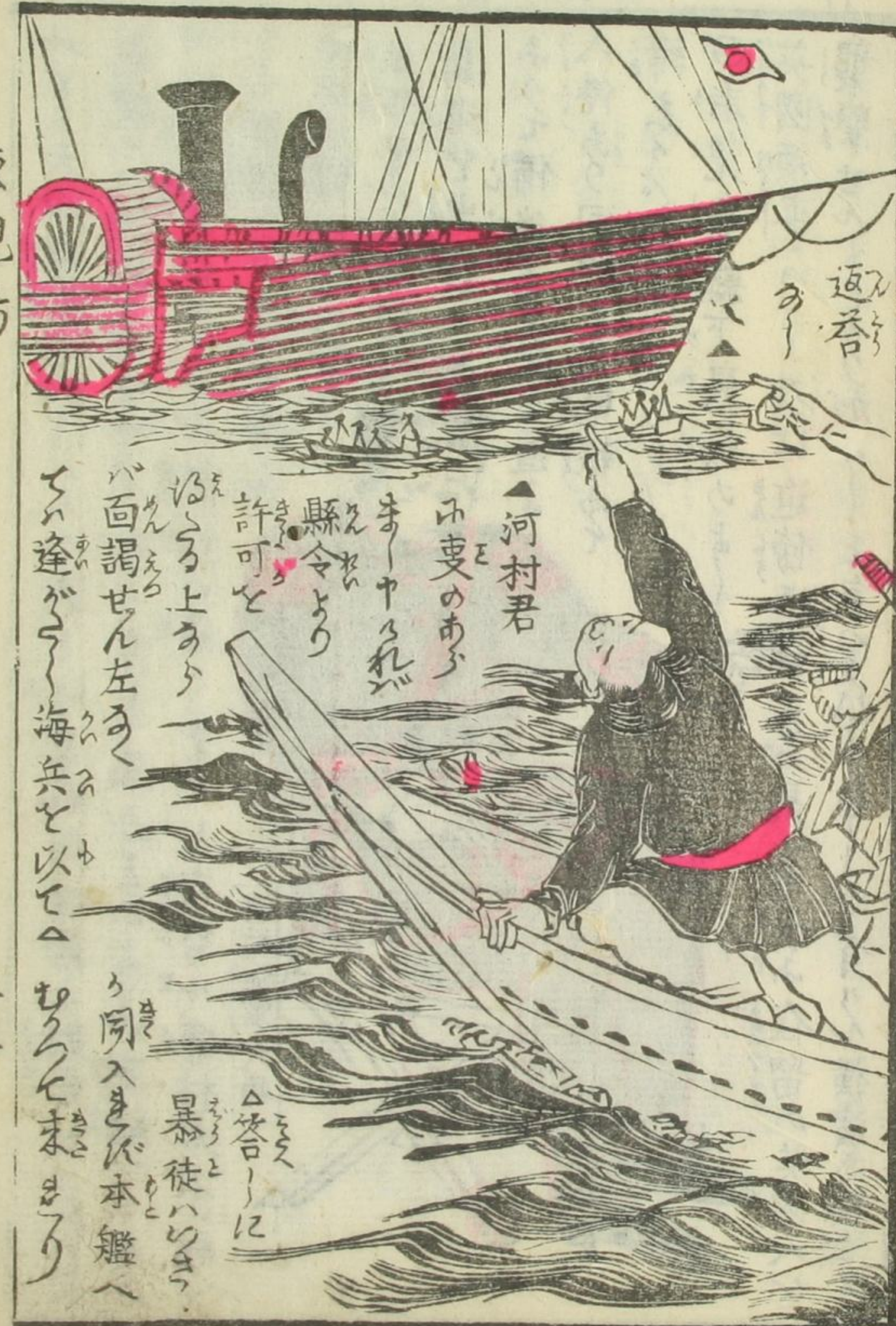
河村君ハ鹿兎島の士族らガ暴動せしと  
聞と共まゝ林内勢少捕と共ハ暴徒らと  
鎮静せん汽船のり込を死急て  
鹿兎島の港に着一暴徒と説解り

のさりと出張の  
手苦小及られ





軍艦の左右のバッテリー十艘へ  
 海兵を固めろ加ふる処へ暴徒共  
 五六十人各帯刀袴鉦巻  
 襦高袴と着しあられハ  
 洋服の出立もありて小舟は  
 うちのり軍艦に近づき  
 頭取めは一人の男自ら  
 四等警部と名のり  
 河村君に面談し度  
 内船まで推参せり取  
 次はうと有られ固め  
 海兵これと聞まづ  
 伺ひて指図せんと

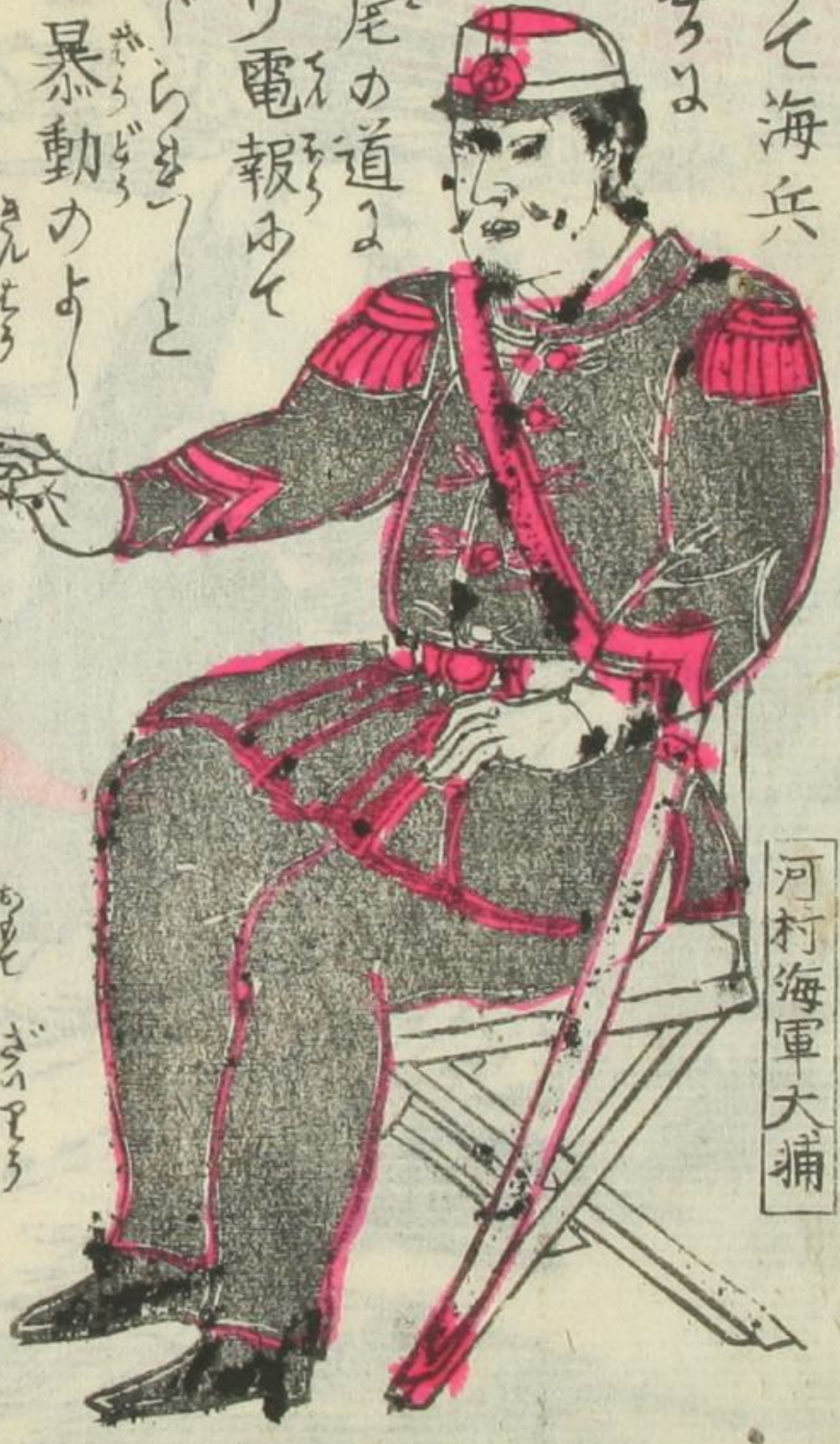


返答

河村君  
 小吏のあふ  
 ましやられ  
 縣令より  
 許可を  
 ばらる上あふ  
 ハ百調せん左ふ  
 逢がう海兵を以て  
 同入ま本艦へ  
 ちろとま  
 △答へに  
 暴徒ハ



此より大山縣令此とて乗り込まれ河村君と對面ありあるに  
 暴徒へ入救加りりますく近くすく來りてふよが軍艦とらふ  
 べに形勢あればも説諭の届くまどと内務少輔林君大山縣令  
 とら服議ありやがて海兵  
 とひに纏めすくすよ  
 出帆せんと鹿兒  
 島港と出發  
 ありて備後る尾の道よ  
 入港あり同所より電報め  
 締まるぐと通だらまつと  
 ○麻兒島縣下暴動のよ  
 英國領事ハミ及び近傍る  
 襲撃せんもろりか  
 と氣つひりりや有らん横濱ふ碇泊せ

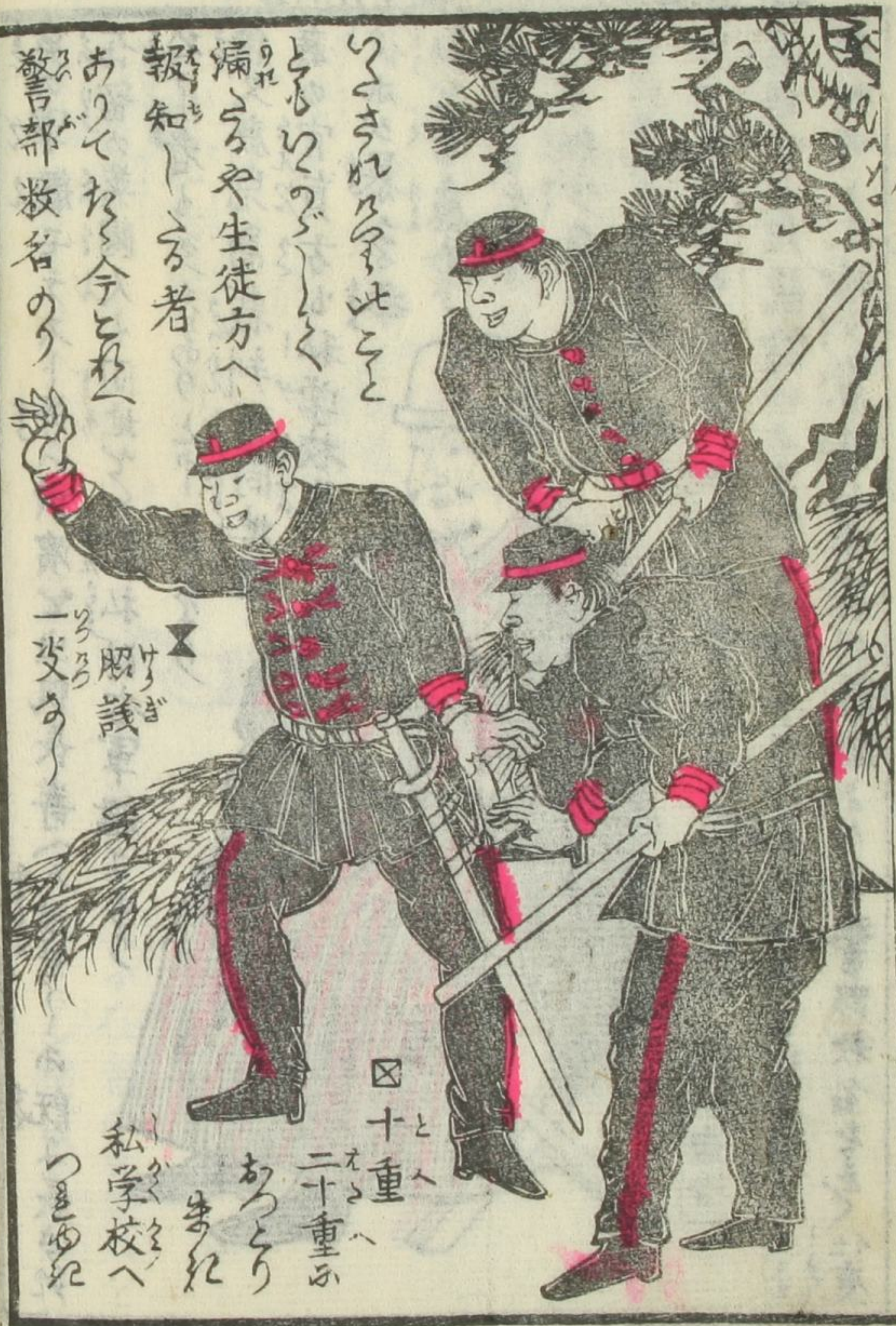


河村海軍大捕

英の軍艦モテスト号の横濱と出帆長崎へ入港せし  
 在留の英國人も同地と引私ひ右軍艦のり  
 又鹿兒島裁判所同地縣  
 廳の官員方も私学校生  
 徒ホが暴る奉  
 動と苦慮あり  
 是何とを事  
 件の細少と静め  
 之れありと種々  
 何ふとさしとより血氣壯年ある生徒ら  
 条理とて説諭のささばの理よふし必無異と治るる  
 裁判所より權少警部山崎某同縣廳よりも警部教名を  
 仕度



大山縣令



いさされらるる此こと  
 ともしのびしとく  
 漏らるや生徒方へ  
 報知しる者  
 おりてた今とれ  
 警言部救名のり

一変あり  
 昭議

十重  
 二十重  
 私学校へ  
 つまひ



込と束らと探りきに  
 表の鎮撫ととる人  
 ひそくに西の隆成五君と  
 殺さんとのあたるあり  
 と嘲々とするあり  
 くれこれとせ

つもまらるる  
 うすとの夢あり  
 警言部とあり  
 迅速なる鎮静  
 小意とするあり

暴徒とも  
 まらるる策の  
 裏と計  
 途中  
 まら伏  
 生捕ん  
 と

生徒とも  
 頭をい  
 理非尋問の  
 つまひ

歩  
 行とつそ  
 松縄とあり

なり



鹿兒島之  
暴徒縣廳と  
襲つんと

一説に鹿兒島縣へ在任せる他縣  
の官員へまをて激徒のそめに函閉  
せらるるなりと此更後の件と合せ  
去れば今般鹿兒島の事件ユカシ  
更ハ西京の行在所より御布告相  
多につれ同所御所内宮内省中へ太政官と  
設けし去一月二十八日より議更といひききに  
お成出席のかさぐさ三條太政大臣。木戸内閣  
顧問。大久保内務卿。山縣陸軍卿。伊藤工部  
。鳥尾陸軍中將。河村海軍大浦あらび  
議官ごららびに太政官の  
書記ちりと

さくく私学校生徒らハ  
暴威ましく熾るれば

近傍より頑固士族ら

ぬけくおきさるれば  
人救日々に増加ありぬ

さくく兵の向いさるさく此方  
より押出さんとその準備

是より暴徒ら縣廳とあそい  
三のちのつる近縣へ探出

戦争の件ハ猶次編下記まじり  
鹿兒島戦記初編下終



# 明治十年二月廿六日御届

定價六匁五厘

下谷上野町二丁目十二番地

編集人 竹條田久次郎

米沢町二丁目七番地

出版人 堤 吉兵衛

